

教育現場からの報告——2021年度を振り返って

高等部

2021年度高等部キリスト教育のまとめ

中久木 眞治

高等部教諭・宗教委員

2020年度同様、コロナ禍に翻弄された一年だった。その中でも二学期には一学年ずつとはいえ、PS講堂での礼拝をおこなうことができたのは幸いだったと思う。生きた聲にふれることができなかったのは残念なことではあったが、一学期にはアスリートのキリスト者をお招きし、映像での配信という形で、伝道週間を持つことができた。

宿泊行事(夏季グリーンキャンプ、冬季ホワイトキャンプ)も、感染症の拡大から宿泊は断念せざるを得なかったが、夏は一日奥多摩の「バイブルシャレー」で、聖書の御言葉に触れ、またレクリエーションも行うことができ、とても楽しい一日を過ごすことができた。

年始に行われた3年生対象のホワイトキャンプでは高等部校舎で一日、バイブルシャレーで一日と宿泊こそできなかったが、それぞれ日帰りで二日間の充実したキャンプを行うことができたことは誠に恵みだった。

そのほか、特別礼拝では堀井ローレンさんを久しぶりにお呼びし、映像の配信とはいえ、ますます磨きのかかった美しい歌声を生徒とともに聞きながら、礼拝を捧げることができたことは幸いなことであった。

二学期の伝道週間も映像の配信だったが、パラリンピックの年ということもあり「傍らに寄り添う」と題してカウンセラーやACEFの方、盲導犬ユーザーの3名の方をお迎えし、それぞれのご経験から語られる神の恵みの証しは貴重な体験だった。

オンライン授業期間も何度かあったが、その時は2020年度と同じく、先生方に短い黙想を書いていただき、それを同じ時間にそれぞれの場所で「メディテーションタイム」を行って、充実した時を過ごすことができた。

最後に、クリスマス礼拝は思い切って2部入れ替えとし、特にお願ひして陣内大蔵先生の賛美を、生演奏で聞くことができたのは望外の僥倖であり、生徒も非常に感動していた。このような機会を与えてくださった神様のお導きに感謝したい。

繰り返しになるが、全体に非常に窮屈な状態で礼拝を受けざるを得なかったことは前年度同様だった。が、教職員・生徒が知恵を出し合って、また支え合って、例年にも増した充実した一年であったことは、来年度につながる自信と希望になるであろう。